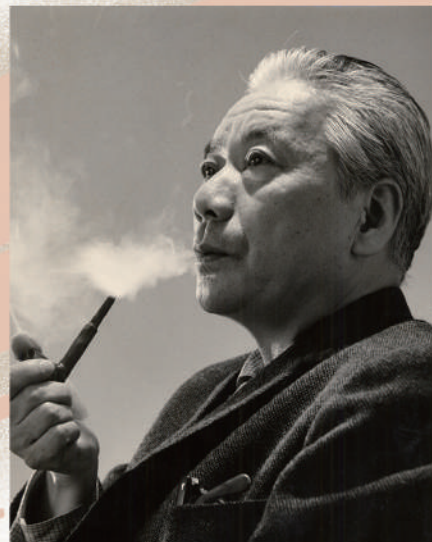




上野



【記念トークイベント】

11月15日(日) 14:00開演

登壇 水白京氏

聞き手 古河文学館 館長

定員 60名 [要事前予約]

費用 200円 (文学館入館料)

申込 10/9(金) 午前9時～
電話または直接来館

【会期】

10月24日(土)



12月23日(水)

家三代記

—物書きの系譜—



- 開館時間 午前9時～午後5時 (入館は4時30分まで) ■入館料 一般200円 小中高50円
■休館日 10月：26日 11月：2日、4日、5日、9日、16日、24日、27日、30日
12月：7日、14日、21日
■交通 [電車] JR宇都宮線古河駅徒歩15分 東武日光線新古河駅徒歩25分
[車] 東北道：久喜IC 40分・館林IC 30分 圏央道：五霞IC 25分・境古河IC 30分

古河文学館

〒306-0033 茨城県古河市中央町三丁目10番21号

TEL 0280-21-1129 FAX 0280-21-1135

URL https://www.city.ibaraki-koga.lg.jp/soshiki/6_1/exhibitioninformation/kikakuten/21505.html



上野家三代記

—物書きの系譜—



上野多喜子 (1909～1994)

岡山県勝田郡豊並村(現奈義町)生まれ。昭和5年2月に上京し神近市子宅に寄宿。その後、戦旗社に入社。同年5月に結婚。以後、夫とともに『プロレタリア文学』『人民文庫』等に参加し、小説や評論を発表した。

昭和53年、自伝的小説『女体』を出版。昭和61年には自伝的エッセイ集『わたしの神戸 わたしの青春—わたしの逢った作家たち—』を出版した。

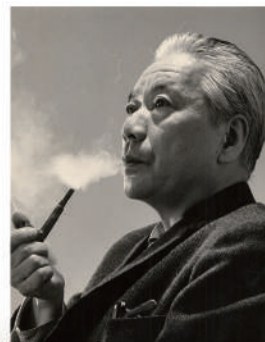
『文芸戦線』『戦旗』等の文芸誌で活躍し、プロレタリア文学運動を語る上で欠かすことのできない詩人・上野^{うえの}壮夫。戦後は花王石鹸宣伝部で数々の広告賞を受賞、東京コピーライターズクラブを発足させるなど、コピーライターの草分けとしても活躍しました。

古河にゆかりのあるこの詩人と、やはりプロレタリア文学運動に携わった妻の^{こさか}上野多喜子。

ふたりの二女で同人誌『文芸復興』代表をつとめながら文筆家として旺盛な創作活動を展開した^{ほりえ}堀江朋子。

そして、音楽関係の記事をメインにライターとして活躍する一方、初の自著を発表した^{みずしろ}朋子の長女・水白京。

三代にわたり脈々と受け継がれる「物書き」としてのDNA——今展では彼らが紡ぎ出してきた作品の数々を紹介します。



上野壮夫 (1905～1979)

茨城県筑波郡作岡村(現つくば市)生まれ。警察官だった父の赴任に伴い、一時期古河にも在住。

昭和3年に結成された全日本無産者芸術連盟に参加、機関誌『戦旗』の編集を担当しながら、多くの詩や評論を発表。その後も『プロレタリア文学』『人民文庫』をはじめとする多くの文芸誌で活躍。戦後はコピーライターの草分けとして活躍した。



水白京 (1966～)

大阪府に生まれ、まもなく東京に転居。早稲田大学商学部卒業後、音楽・映像ソフトの企画制作、販売会社で10年間勤務。

平成9年より音楽ライターとしての活動を始め、これまでに約650本のインタビュー、300本以上のライブ・イベントのレポートを雑誌やWebサイトに発表。

令和3年より同人誌『文芸復興』に不定期で寄稿。

令和8年3月に初の著書『去り際』を出版。日本文藝家協会会員。



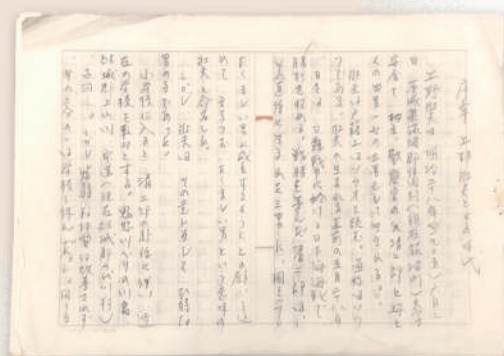
上野壮夫自筆原稿 「革命の文学 文学の革命」



上野壮夫著
『詩集 黒の時代』
昭和52年(1977)
栄光出版社



上野多喜子著
『わたしの神戸 わたしの青春』
昭和61年(1986) 三信図書



堀江朋子自筆原稿 「風の詩人—父上野壮夫とその時代」



堀江朋子 (1940～2021)

東京・上落合で上野壮夫多喜子の二女として生まれる。早稲田大学法学部卒業。(財)民族学振興会図書室の司書として約20年間勤務。

平成7年頃から執筆活動を開始。司書経験者らしい地道で丹念な調査に基づく評伝、ドキュメント、時代歴史小説を多く著した。

平成22年から第3次『文芸復興』の代表をつとめ、同24年からは岩手県北上市のしらゆり大使をつとめた。



水白京著 『去り際』
令和8年(2026) 花伝社



堀江朋子著『風の詩人』
平成9年(1997) 朝日書林